大学の世界展開力強化事業　第 1 回外部評価委員会　議事要旨（抜粋）

日時：2024 年 3 月 25 日（月）日本時間 17 時 00 分～18 時 00 分
会場：オンライン
出席者：

〈外部評価委員（敬称略、五十音順)〉

◆　広島大学大学院　先進理工系科学研究科・教授
◆　在英国日本国大使館・参事官

〈神戸大学〉

◆　大学院工学研究科・研究科長
◆　大学院工学研究科・副研究科長（国際担当）
◆　工学部・特命助教

陪席者：

〈神戸大学〉

◆　大学院工学研究科・学務課教務学生係長

1. 開会のあいさつ

- 研究科長より開会のあいさつがあった。
- 司会の特命助教より委員の紹介があった。

2. 令和 4 年度・5 年度プログラム進捗状況報告

- 教育担当の副研究科長より、令和 4 年度・5 年度プログラムの進捗状況について報告があった。
- 報告概要は以下のとおりである。
  - ①　「世界的課題解決に向けた工学系グローバル人材育成のための国際共修／協働学修プログラム」概要
  - ②　令和 4 年度派遣プログラム
    - 2023 年 3 月 13 日(月)から 3 月 22 日(水)にかけて、神戸大学工学部生（2 年次生 15 名・3 年次生 15 名）計 30 名をオーストラリアへ派遣した。本来であれば 2 年次生のみを海外へ派遣する計画となっていたが、新型コロナウイルス感染症拡大（以下、「コロナ禍」と記載）の影響により渡航が延期となっていた学年を併せて、2022 年度は特例として 2 学年合同での派遣となった。

③　令和 5 年度派遣プログラム（実施概略）

- 2024 年 3 月 12 日(火)から 3 月 22 日(金)にかけて、神戸大学工学部 2 年次生 16 名をオーストラリアへ派遣した。2023 年度より原則通り 1 学年のみの派遣となっている。帰国直後の委員会実施となったため、第 1 回外部評価委員会では実施概略のみと報告とした。

④　令和 5 年度受入プログラム

- 2023 年 6 月 29 日(木)から 7 月 12 日(水)にかけて、主な海外交流相手大学であるロイヤルメルボルン工科大学（オーストラリア）とマヒドン大学（タイ）より計 22 名の学生を受け入れた。もともと工学部・工学研究科では 2018 年度と 2019 年度に短期留学生受入プログラムを実施していた。2020 年度以降はコロナ禍の影響により中止を余儀なくされていたが、文化越境・領域横断的な視座を有した工学系グローバル人材を育成していくことを目指す異文化間共修の必要性から 2023 年度に再開することとなった。

⑤　令和 6 年度の計画

- 2024 年 7 月 1 日(月)から 7 月 12 日(金)にかけて、「防災・減災」をテーマに据えた受入プログラムを開催予定である。海外交流相手大学より、継続して 20 名程度の受入を計画している。
- 令和 4 年度・5 年度と同様に、オーストラリア（ロイヤルメルボルン工科大学）へ学生を派遣する計画である。2025 年 3 月頃に工学部 2 年次生 16 名を派遣する予定となっている。

3. 評価委員によるコメント・質疑応答抜粋（神戸大学側参加者の発言も含む）

以下、コメント・総評と質疑応答を要約して掲載する。

○ 外部資金でこのような国際交流に係るプロジェクトを運営する場合、内部で国際交流系の活動にコミットしている教職員が新たな活動を付随させる動きが連動して出てくるか否かがプログラムの成否を分けるように感じている。例えば、インターンシップの前後にはどのような活動を取り入れるべきかや、プログラムを経て国際公務員などへの志を抱く学生が増えているようであればそのようなキャリアパスを支援するような国際公務員セミナーを開催するなど。

○ このプログラムの目的としては、第一義的には留学生数の増加などがまずあるとは思うが、神戸大学と他大学とのネットワークを複層的に構築し、様々な場面で連携が深まっていくことが重要である。タイやオーストラリア、米国など様々な大学との交

流を実施されているので、そのマルチプルな場を英語の学習でも活用できると良いのではないか。バイではなくマルチプルの場でいかに自分の意見を主張するかという経験ができると学生にとっても良いと思う。

○ 未知のものに対して相手側の思考 way of thinking を想像する俯瞰力が必要となる。この点が、同じような思考の人々の間で話している者にとって非常に不得意なものである。未知の相手の考え方を俯瞰できる能力を養えるかという最終的な目的すら恐らく分からない。この種のプログラムを通じた個人のつきあいの方がそうした能力を養うことに向いているという可能性も考えられる。発言の裏が読めないという経験を、個人的なつきあいを通じて積まなければ分からないかもしれない。こうした点を様々な専門家を交えて学生に教えていけると良いのではないか。

4. 閉会のあいさつ

- 研究科長より閉会のあいさつがあった。

（以上）